

オランダ・エリアス学派

——苦悶する1980年代——

市 井 吉 興

はじめに

1970年代にオランダ・エリアス学派はオランダ社会学界において隆盛を極めたが、1980年代に急速にその理論的かつ組織的な求心力を低下させた。その発端となったのが、1981年12月に開催された国際学会で勃発した「内紛」にあった。この内紛は、エリアス社会学の根本である「文明化過程論」の解釈をめぐる対立を背景としていた。

しかし、学会開催期間中にこの内紛が、理論的に「調停」されたとは言い難く、むしろ感情的な「しこり」が残された。また、根本概念をめぐる内紛であったがゆえに、学会後、オランダ・エリアス学派のみならず、エリアス研究者、そしてエリアス自身も、競合する社会学派から辛辣な批判にさらされることとなった。それゆえに、1980年代を通じてエリアス自身、オランダ・エリアス学派、エリアス研究者は「反批判の日々」を強いられた。

本稿の目的は、オランダ・エリアス学派の凋落をもたらした国際学会における内紛の論点整理を出発点として、1981年の国際学会以降の1980年代オランダ・エリアス社会学派の反批判の日々、つまり苦悶の時期にもたらされた理論的到達を検討することである。その際、本稿はオランダ・エリアス学派の理論的葛藤を単にエリアスの基本概念をめぐる発生したものとして把握するのではなく、同時期にオランダ政府が行った福祉国家政策再建にともなうオランダ社会学界への政策的介入とも関わらせた分析を試みる。

1. 苦悶のはじまり：1981

——十字砲火にさらされるオランダ・エリアス学派——

拙稿（市井2001）でも述べたように、1970年代はオランダ・エリアス学派とエリアスにとってまさに順風満帆な時期であった。まずは、この時期の彼ら/彼女らの状況を簡潔に振り返っておきたい。

ハウツブロム（Johan Goudsblom）の尽力によりエリアスを客員教授として1968年と1969年にオランダに招聘したときから、すでにオランダでの「エリアス・ブーム」は約束されていたといえる。つまり、グールドナー（Alvin W. Gouldner）が指摘した「社会学の危機」に登場したエリアス社会学は、戦後オランダ社会学界をリードしてきた「現代社会学派（Modern Sociologie）」が中心に置いた「スタンダードアメリカ社会学」に対するオルタナティブとして期待された。また、エリアスがオランダに招聘された時期は、フランスの5月革命の影響を受けたオランダの学生運動が激化しており、大学封鎖のなかで学生と積極的な

対話を行ったエリアスは学問以外での人気をも博すようになった (Israels, Komen en Swaan 1993)¹⁾。それゆえに、学生はもちろんのこと、若手研究者たちもエリアスの講義に参加し、主著である『文明化の過程』(1939)は「カルト的な熱狂をもって迎えられた」(Mennell 1992: 24)のである²⁾。

その後、ハウツプロムは、若手研究者(社会学、歴史学、政治学、文化人類学)や院生たちとアムステルダム大学を拠点にエリアス社会学を導きに研究活動を開始し、その成果を発表する場として1973年に『アムステルダム社会学雑誌 (AST: Amsterdam Sociologisch Tijdschrift)』を刊行した。さらに、ハウツプロムはエリアスの影響を受けたイギリス、ドイツの研究者との交流を深めながら、1976年に「オランダ社会学・文化人類学学会 (NSAV: Nederlandse Sociologische en Antropologische Vereniging)」内部に「フィギュレーション社会学部会」を創設し、活発な研究活動を展開した³⁾。

そこでの彼ら/彼女らの活動は、実に豊かなものであった。例えば、1977年にエリアスの生誕80周年を記念した論文集 *Human Figuration* を発表するが、そこで発表された成果はエリアス研究の最先端であり、まさにエリアス社会学の「橋頭堡」を築くこととなった。さらに、1978年にはエリアスがフランクフルト市が設置した「アドルノ賞」の第一回目の受賞者となり、彼の評価は「ヨーロッパのエリアス」から「世界のエリアス」へと一気に駆け上がったのである。

しかし、このように順風満帆であったオランダ・エリアス学派は、思わぬ失態を曝してしまう。しかも、皮肉なことに、それがさらなるエリアス研究の発展を画した国際学会という場における「内紛」という形で現れた。

1981年12月17日と18日にオランダ社会学・文化人類学学会のフィギュレーション社会学部会が主催となった国際学会がアムステルダムで開催された。このときの学会テーマは「文明化理論と文明化過程」であり、学会の発表者は社会学者、歴史研究者、文化人類学者からなる総勢23名であった。また、この学会にはエリアス自身も参加し、「文明化と平和 (Civilization and Pacification)」という基調講演を行い、それを受けた議論が3つのテーマ・セッション(近代ヨーロッパの文明化過程 前近代ヨーロッパの文明化過程 ヨーロッパ以外の文明化過程)において行われた。それでは、ここでの議論をヴィルターディンク (Nico Wilterdink) の回想録 (Wilterdink: 1982) をもとに検証していくこととする。

「はじめに」でも記したように、この国際学会で勃発した内紛は、エリアス社会学の根本にある文明化過程論の理解の相違にあった。回想録の冒頭に記されたヴィルターディンクのコメントは、文明化過程論理解の難しさと学会の混乱ぶりを想像させる。

職業学校での違法行為、闘牛の発生、古代ローマにおける公開処刑、スリナムにおけるブッシュマンの感情抑制、19世紀における動物保護、マースレンダー地方における貴族集団の作法、エスキモーの闘争調整、専門的な死の帮助、中世騎士の攻撃欲、これらのテーマは共通性を持っている。つまり、これら全てのものは「文明化過程」として分析されることが可能であるということである (Wilterdink 1982: 571)。

それでは、この国際学会での争点は何であったのか。ヴィルターディンクの回想録に即して

みると、争点は以下の3点に集約されよう。まず、「文明化過程とは単線的な進歩を描いたものか、否か」という問題である。次に「暴力抑制や自己抑制といった文明化の段階を計る普遍的な基準を設定することは可能なのか」という問題である。最後に、「文化人類学的なデータ（いわゆる『未開』の人々においても高度な自己抑制を見出すことが可能である）に対して文明化過程論はどのような説明を成しうるのか」という問題である。いずれにしても、これらの争点——むしろそれを「違和感」と称することも可能であろう——はエリ阿斯社会学の根本にある文明化過程論の理解に関わるものである。同時に、文明化過程論に対する争点や違和感が社会学者よりも、むしろ文化人類学者や歴史学者から提示されたことは、大きな特徴といえよう。このことは、この学会においてエリ阿斯批判の急先鋒であった文化人類学者のブローク（Anton Blok）の発表に収斂された。

ブロークが行った「未開と文明」という発表は、この学会において最もスキャンダラスな事件となった。この発表において、ブロークは文明化過程論を完膚無きまでに批判したが、ブロークのエリ阿斯批判の要点は2点に集約される⁴⁾。まず、「文明化過程論は単線的な進化論にほかならず、つねに『進歩』を前提としている」という指摘である。次に、「エリアスの文明化過程論は『西欧対非西欧』を前提とした西欧中心主義にほかならず、『文明化対未開』という枠組みは民族中心主義的な視点からなされたものである」という痛烈な批判である。これらの批判でも文明化過程論に対する批判としてインパクトがあったのだが、さらにブロークはエリアスを「人種差別主義者」と非難してしまう（Wilterdink 1982: 571）。当然のことながら、このブロークの発言は国際学会を紛糾させ、オランダ・エリ阿斯学派の「分裂」をオランダ社会学界内外に対して決定的なものとした。やはり、ブロークがハウツプロムらとともにオランダ・エリ阿斯学派結成時からの中心人物であったからこそ、ブロークの発表や発言はエリ阿斯学派に対する「背信行為」にほかならず、感情的な反発を引き起こした⁵⁾。

確かに、ブロークの「人種差別主義」発言は行き過ぎであった⁶⁾。とはいえ、ブロークの批判は文明化過程論の理論的脆弱性を捉えていた。つまり、「社会編成が高度化されると、自己抑制も強化される」というエリアスの文明化過程論の基本的なスタンスは、「エリ阿斯が社会と個人の関係を機能的な因果関係に基づいて構想しているため」と批判されたのである。しかも、ブロークをはじめとした文化人類学者たちが異口同音に主張したように「社会編成の高度化という構想こそ、いくら研究の射程を『中世』に拡大したとしても、ヨーロッパの近代国民国家形成過程を前提としたものにほかならない」と指摘されるのであった。

残念ながら、このような批判に対し、国際学会の場においてオランダ・エリ阿斯学派、なかでも社会学者から理論的に有効な反批判がなされたとは言い難い。それゆえに、ヴィルターディンクは「学会を通じて明らかになったことは、文明化過程論が様々な歴史的段階における文明化の程度の比較を考察するうえで、十分に普遍的かつ確実であるかを検討する必要がある」（Wilterdink 1982）と総括せざるをえなかった。したがって、国際学会以降、「文明化過程論は潜在的な進化論と機能主義との混合」というエリ阿斯社会学批判が急速に広がり、エリ阿斯社会学はこれまで経験したことのない窮地に立たされた。

2. 「オランダ病」の克服とオランダ社会学界 ——福祉国家政策再建と社会学への「期待」——

先の国際学会を機に劣勢に立たされることとなったオランダ・エリアス学派は、理論的正当性を復活させるための反批判とともに、さらなる闘いを強いられた。それは、1970年代後半からみられたオランダの福祉国家政策再編にともなう高等教育財政の大幅な見直しであった。しかも、それは単なる予算削減にとどまらず、「社会学部の縮小を伴う再編」という荒療治であった。

このような高等教育の再編を迫った要因は「オランダ病」にあり、その克服としてなされたことにほかならない。今日、この「オランダ病」は「天然資源と経済成長との関係において、天然資源（オランダの場合は天然ガス）価格の高騰によって、『ウィンドフォール・プロフィット（不労所得）』を得た国が、その経済政策運営を誤ったことによりもたらされる経済危機を表す言葉」（長坂2000: 16）として国際的に定着している。以下、オランダの福祉国家政策の盛衰を手短かにまとめておきたい⁷⁾。

1960年代、北海におけるオランダの天然ガスの発見・産出は、オランダに多大な為替収益をもたらし、資源輸出の増加と資源輸入の削減により、実質為替レートを過剰に上昇させることとなった。同時に、天然ガス・ブームによる財政収入の増加により政府支出は過剰となり、社会福祉制度は大幅に拡充されていった。その結果、1970年代にはオランダはヨーロッパのなかでも最も社会保障制度が充実した「豊かな国」となったのである。

しかし、その後、天然ガス価格が下落し財政収入が縮小したにもかかわらず、財政支出は高い水準を維持した。なかでも、急速に拡充された社会保障制度を維持するために増税が必要となった。天然ガス・ブームが終息したときには、企業の国際競争力は失われ、失業者が増大し、2度にわたるオイルショックの影響もあり、オランダ経済は大不況へと陥ったのである。まさに、1980年代初頭のオランダは、政府財政の管理不能、急増する税負担、労働コストの高騰、失業の増大、労働組合運動の激化にみまわれ、再起不能の状態に陥った。

この経済危機に直面したオランダ政府は財政再建を目指し、福祉や社会政策全般の見直しを迫られることになった。その試みのひとつとして、「ダッチ・ミラクル」と称され、福祉国家再建の成功例として注目を集めた「ワークシェアリング」がある。様々な改革が試みられるなかで、高等教育財政も大幅な見直しが求められた。1960年代と1970年代を通じて、文教関連予算における高等教育予算の割合は、10%後半から20%前半を占めていた（Haan 1996: 71）。同時に、社会学部への入学者数も1962年から1972年までの10年間は順調に増加し、1972年には6000人にまで達した（Haan 1996: 76）。しかし、1972年の入学者数をピークに、その後下降線を描くこととなる。ハーンが作成したグラフを見ると、二度のオイル・ショック（1973年と1979年）の後に入学者数の極端な減少を確認することができる。また、卒業生の雇用状況もオイル・ショック以降から低調になっていく（Haan 1996: 77）。

確かに、このような推移をみれば、オイル・ショックを入学者数の減少を招いた主要な原因として指摘することもやぶさかではない。しかし、問題なのは1980年代になっても学生数が減り続けたことである。オイル・ショックを機に現れた学生数の減少について、ファール（Mark

Van de Vall）とレーウ（Frans L. Leeuw）は「学生たちの関心は、社会学よりも専門的な教育を行う分野へと移っている」（Vall and Leeuw 1987: 195）と指摘した。つまり、ここに単なる高等教育を取巻く経済問題には解消されない、「社会学」そのものに対するオランダ政府による政策的転回と評価の核心が秘められているのではないだろうか。

「1968年5月革命」に触発されたオランダ社会学界の再編は、戦後オランダ社会学の中心を占めてきた「スタンダードアメリカ社会学」を舞台から引きずりおろし、様々な社会学理論の競演をもたらした。それぞれが研究集団を組織化していくこととなった（市井2001）。また、この競演は、戦後オランダ社会学界を牽引してきた現代社会学グループが掲げた「社会学者は社会エンジニアである」という社会学者のレゾン・レーテルに対するオールタナティブを示すことでもあった。

それゆえに、各理論グループは1970年代を通じて社会学を「計画された社会変革（planned social change）」（Leeuw 1991: 111）との関わりのもとで積極的に発展させた。この計画された社会変革とは「1968年革命」以降の福祉国家政策再編にほかならず、各理論グループは様々な社会問題（例えば人口移動、労働市場、エネルギー問題、環境問題、宗教問題、脱柱状化）に対する調査研究を積極的に展開した（Berting 1985）。また、オランダ政府からもたらされた豊かな財政援助は各理論グループの組織化を促進させた。

しかし、1980年代になると「計画された社会変革」を実現させることが困難になるにつれて、オランダ政府は効率的な「予算削減」、つまり「プライバタイゼーション（民営化）」を行うための情報収集の担い手としての役割を社会学に期待した。このような社会学に対するオランダ政府の接近の仕方は、明らかに1970年代に比べて政策誘導的な色合いを深めている。なかでも、1982年から導入された新たな文教予算融資制度である「条件付き融資（VF: Voorwaardelijke Financiering）」は、競合する理論グループ間の競争を激化させた⁸⁾。つまり、このシステムのもとで、新たなプロジェクト研究が形成され、研究成果に応じた予算配分がなされたのである。当然のことながら、この融資制度導入により、調査研究は新制度導入以前に比べて時間をかけることを許されず、その一方で成果はきっちりと求められるという悪循環に陥っていった（Haan 1996: 73）。つまり、このことは調査研究に対する成果主義の徹底と強化にほかならなかった。

さらに、この条件付き融資制度と平行して、オランダ政府は社会学部の再編＝統廃合を提起する。その第1弾が1983年のフローニンゲン大学社会学部の閉鎖であり、その後次々と統廃合が実施されていった（Becker and Leeuw 1994: 159）⁹⁾。最終的に、オランダ政府は1980年代末までに、9つあった社会学部を6つにまで削減した（Haan 1994: 69）。また、閉鎖を免れた学部でもカリキュラム再編や募集定員の見直し等を含んだ学部規模の縮小、スタッフの削減は必至となった。この事態はオランダ社会学界の危機にほかならず、それゆえに自らの学問のレゾン・レーテルやアイデンティティをかけた議論を呼び起こすこととなる（Becker and Leeuw 1994: 154）。まさに、強権的なオランダ政府による社会学への介入は、1970年代を通じて「独自の研究集団」を築き上げてきた理論グループに対する「揺さぶり」以外のなにものでもなかった。

先にも示したように、オランダ病を克服するにあたり、オランダ政府は社会学を「効率的な

予算削減を行うための情報収集の担い手」として位置づけたかった。それゆえに、1970年代を通じて形成された多様な理論グループの存在は、オランダ政府にとっては「閉鎖的な研究集団」、悪く言えば「蛸壺化した排他的な専門家集団」でしかなかった。そこで、オランダ政府は各理論グループ間の壁を強権的に除去することによってしか、社会学をコントロール出来ないと判断したといえよう。

しかし、条件付き融資制度や社会学部の統廃合といったオランダ政府の試みは、かえって社会学のアクチュアリティを封じ込めることになったのではないだろうか。つまり、先に記したファールとレーウウが指摘した学部学生数の減少は「オランダ政府による社会学への介入が社会学的想像力に制約を課し、学問的な魅力を失わせた」といえるのではないだろうか。それゆえに、願わくば「いったい社会学は誰のためのものなのか」という社会学者からのアクチュアルな問いかけが発せられる必要があった。しかし、残念ながらオランダ社会学界にはその余裕すらなかったのである。

3. 苦悶するオランダ・エリアス学派

—— 1980年代の危機から見たものとは？ ——

1991年に大学間における社会科学研究を促進するために設置された学術機関である「SISWO (Stichting Interuniversitair Instituut Sociaal Wetenschappelijk Onderzoek)」から『発展の継続のために：オランダ社会学における到達の評価 (*In Pursuit of Progress: An assessment of achievements in Dutch Sociology*)』と題されたテキストが出版された。このテキストは1990年5月にオランダ社会学・文化人類学学会によって開催された学会の記録集であるが、この学会の目的は以下の二点に集約される。

まず、「1980年代を通じてオランダ社会学がどのような到達を成し遂げたのか」という総括を行い、次に「これからの展開に向けて、各理論グループがどのような戦略を構想するのか」を討議することになった。この学会で中心的な報告を行ったのが、1980年代を通じてオランダ社会学界で紆余曲折を経ながらも勢力を保ってきたオランダ・エリアス学派、ユトレヒト大学とフローニンゲン大学の「説明社会学派 (Explanatory sociology)」、レイデン大学の「データベース社会学派」であった。なかでも、オランダ・エリアス学派を代表して報告を行ったヴィルターディンクによる総括と展望は、単にエリアス社会学の理論的優位性を強調するものではなく、むしろ、理論グループ相互の学際的な交流を求め、注目を集めた (Wilterdink 1991: 63-5)。しかも、その学際的な交流を求めた相手が説明社会学派であったことは、オランダ社会学界内に意外性と違和感を与えた。

この意外性と違和感は、この学会にゲストとしてドイツから参加したエッセル (Hartmut Esser) にも感じられた。そこで、エッセルはオランダ社会学界の状況を次のように批評した¹⁰⁾。

部外者からすれば、今日のオランダ社会学には特殊な二重性が存在している。この二重性とは相反する二つの「パラダイム」が異例の分裂状態を示していることにある。このパラダイムが、

アムステルダム大学を中心としたフィギュレーション社会学派とユトレヒト大学とフローニンゲン大学の説明社会学派である（Esser 1991: 133-4）。

さて、説明社会学派であるが、この学派もオランダ・エリアス学派と同様に1960年代後半から1970年代前半かけてオランダ社会学がアメリカ社会学からの離脱を試み、多様化していく過程で登場した。この時期、『科学革命の構造』（1962）を著したクーン（Thomas Kuhn）によって提起された「パラダイムの転換」というテーゼは、オランダ社会学界の理論的多様化に拍車をかけた。なかでも、「パラダイム」、「理論的パースペクティブ」という言葉は流行語のごとく掲げられ、社会学理論は実態的な理論問題から乖離した「メタ理論」へと展開していくことになったのである。

しかし、説明社会学派は、このような状況に対して批判的なスタンスを取った。この学派の主導的な役割を担ったウィップラー（Reinhard Wippler）は、メタ理論家たちの「理論的営為と経験的調査との乖離」に対する不満を表明する。さらに、社会学が多様化するあまり、社会学が自身を語るための「共通の言語」を失ってしまった状況に対して、ウィップラーは社会学を「説明可能な学問」として再構成することの必要性を主張した（Wippler 1978a: 138）。また、このように自己の立場を明確にしていく過程で、説明社会学派はたびたびエリアス社会学の理論的脆弱性を批判し、オランダ・エリアス学派に対する最大のライバルとなっていく（Wippler 1978, Flap en Kuiper 1979）。

説明社会学派は、このような問題意識を開花させていくにあたり、その範をポパー（Karl Popper）の「批判的合理主義」に求めた。その後、説明社会学派は批判的合理主義からヴェーバーやデュルケムといった古典社会学の研究を通して、社会学の根本問題である秩序問題と社会的ジレンマの研究を強化していくこととなった。特に、1980年代は前章で紹介した条件付き融資制度のもとで、ミクロ-マクロ・リンクおよび行為の多元的合理性に依拠した理論的・実証的研究を促進し、オランダ福祉国家再建のための積極的な政策提言を行った（Haan 1996: 183-7）。同時に、説明社会学派は対外的には「オランダ社会学界における合理的選択理論の拠点」として紹介され、評価されていくことになる¹¹⁾。このような経過から判断すれば、「説明社会学派は1980年代のオランダ社会学界の危機を優等生的に乗り越えた」と称することが出来よう。

それにしても、なぜオランダ・エリアス学派は説明社会学派を学際的な交流の相手として選択したのだろうか。その「転機」は、スワーンの『国家の管理のもとで（*In care of the state*）』（1988）というテキストの発表にあった¹²⁾。

このテキストの中心的テーマは、ヨーロッパとアメリカにおける「福祉国家の社会的発生」の比較研究にあった。この比較研究をするうえで、スワーンはそれをフィギュレーション社会学と合理的選択理論との理論的接合によって成し遂げようとしたのである。つまり、スワーンはフィギュレーション社会学と合理的選択理論がそれぞれの理論的特徴として掲げるミクロ-マクロ・リンクを「相互依存（interdependence）」概念と「権力（Power）」概念を梃子として発展させることを試みたのである。このようなスワーンの試みは、合理的選択理論が構想した「ミクロ現象がマクロ現象へと転換されるミクロ現象の集積メカニズムの追求」、つまり「ミクロ-マクロ転換の分析」をフィギュレーション社会学的な視点からアプローチすることであっ

た。そこで、スワーンは個々の行為が集合行為やシステムへと転換するときに発生する様々な社会的要因を文明化過程論を用いて論じたのである。

確かに、スワーンの試みは、エリアスの文明化過程論に忠実なものとなっている。まさに、エリアスの文明化過程論が目指すことは、パウマン（Zygmund Bauman）の言葉を借りるのであれば、「人間同士の関係のネットワーク上で、諸個人の矯正を通じて、人間同士の関係の望ましいパターンを獲得すること」（Bauman 1987: 91=1995: 128）を明らかにすることにほかならない。この点を敷衍していけば、合理的選択理論やネットワーク理論が力点を置いている「規範の内面化よりも人々の行為のネットワークによる行為のコントロール」という視点と理論的には接合可能なものになるう。

しかし、フィギュレーション社会学と合理的選択理論との理論的接合を急ぐあまり、スワーンが見落としている問題がある。それは、合理的選択理論が前提としている人間像、つまり「ホモ・エコノミクス」に対する評価である。これまで社会学は、ホモ・エコノミクスの人間像を批判し、ホモ・ソシオロジクスの人間像のもとで自身の理論的發展を築き上げてきた。それゆえに、合理的選択理論が社会学のなかで影響力を示すようになると、ホモ・エコノミクスの人間像に対する強い批判がなされた。その一方で、太郎丸博は「合理的選択理論がマイクロ・ミクロ・リンクの重視とともにホモ・エコノミクスの人間観を修正している」（太郎丸 2000: 290）と指摘している¹³⁾。

確かに、この問題は理論社会学にとって重要なテーマとして継続的に議論されるであろう。ただ、フィギュレーション社会学と合理的選択理論との理論的接合を掲げてこの議論に関わったスワーンは文明化過程論の意義を見落としていた。つまり、スワーンはエリアスが文明化過程論によって従来の「人間像」に見られた「完全に自立した個人」という神話性を暴露するという試みから得られた「開いた人々（homines aperti）」という人間像の意義を見落としたのである¹⁴⁾。この問題については、稿を改めて議論をしなければならないが、スワーンの議論に象徴されるように、1980年代のオランダ・エリアス学派は完全に進むべき方向を見失っていた¹⁵⁾。

まとめにかえて

1990年、オランダ・エリアス学派は結成25周年を記念して『過程としての社会：オランダにおけるフィギュレーション社会学の著書目録』を発表した。この著書目録集の「序章」において、ハウツブロムはオランダ・エリアス学派の研究成果をふりかえっている。

そのなかで、ハウツブロムは「歴史的な出来事のひとつ」として1981年の国際学会について「この学会以降、オランダでのエリアス研究、さらにはヨーロッパでのエリアス研究は停滞した」（Goudsblom 1990: 19）と述懐している。一時期流行した言葉を用いるのであれば、国際学会に端を発した1980年代のエリアス研究の停滞は、まさに「失われた10年」と称することも可能である。しかも、それがエリアス社会学の理論的な側面だけでなく、オランダ・エリアス学派を含めたオランダ社会学界全体に降りかかった「政治経済的な危機」によってもたらされたことでもあったので、「再生」への道は困難を極めた。

それでも、この時期、オランダ・エリアス学派は改めてエリアス社会学の根本である文明化

過程論と向き合い、エリアス社会学に与えられた汚名の返上に努めた。残念ながら、その成果は1980年代に現れることはなかったが、1990年代に試みられるエリアス社会学再構成に向けた論点が提示されたことは事実である。

注&引用文献ならびに参考文献一覧

邦語文献

- 市井吉興, 1999, 『脱形式化』としての文明化過程論 - オランダ・エリアス学派による文明化過程の新展開』『立命館産業社会論集』35 (3): 21-42 .
- , 2001, 「文明化過程としての社会構成 - ノルベルト・エリアスの社会学的想像力」『立命館産業社会論集』35 (4): 13-35 .
- , 2004, 「エリアス社会学のパースペクティブ - 文明化過程・宮廷社会・スポーツ」『新しい歴史学のために』253: 1-11 .
- 太郎丸博, 2000, 「社会学における合理的選択理論の伝統とその可能性」『理論と方法』15 (2): 287-98 .
- 長坂寿久, 2000, 『オランダモデル - 制度疲労なき成熟社会』日本経済新聞社 .
- 水島治郎, 2002, 「大陸型福祉国家 - オランダにおける福祉国家の発展と変容」宮本太郎編『福祉国家再編の政治』ミネルヴァ書房 117-47 .

外国語文献

- Alexander, Jeffrey C.(eds), 1987, *The Micro-macro link*, Berkeley, University of California Press. (= 1998, 石井幸夫他訳『ミクロ・マクロ・リンクの社会理論』新泉社 .)
- Bauman, Zygmund, 1987, *Legislators and Interpreters*, London, Polity Press. (= 1995, 向山恭一他訳『立法者と解釈者 - モダニティ・ポストモダニティ・知識人』昭和堂 .)
- , 2000, *Liquid Modernity*, Cambridge, Polity Press. (= 2001, 森田典正訳『リキッド・モダニティ - 液状化する社会』大月書店 .)
- Becker, Henk. A. and Frans L. Leeuw, 1994, “Contemporary Sociology in the Netherlands”, R. P. Mohan(ed.), *Handbook of contemporary developments in world sociology*, Westport, Greenwood Press, 153-84.
- Becker, Henk. A., Frans L. Leeuw and Kitty Verrips(eds), 1991, *In Pursuit of Progress*, Amsterdam, SISWO publication.
- Berting, Jan., 1985, “Continuity and Changes in Dutch Sociology: 1970-1984”, *The Netherlands Journal of Sociology*, 1 (1): 4-19.
- Blok, Anton, 1974, *The Mafia of a Sicilian village, 1860-1960 : a study of violent peasant entrepreneurs*, London, Blackwell.
- , 1982, “Primitif en geciviliseerd”, *Sociologisch Gids*, 29(3-4): 197-209.
- Elias, Norbert, 1969a, *Über den Prozeß der Zivilisation 1*, Frankfurt am Main, Suhrkamp. (= 1977, 赤井慧爾他訳『文明化の過程 (上)』法政大学出版局 .)
- , 1969b, *Über den Prozeß der Zivilisation 2*, Frankfurt am Main, Suhrkamp. (= 1978, 浜田節夫他訳『文明化の過程 (下)』法政大学出版局 .)
- , 1970, *Was ist Soziologie?*, München, Juventa Verlag. (= 1994, 徳安彰訳『社会学とは何か』法政大学出版局 .)
- , 1991, *Die Gesellschaft der Individuen*, Frankfurt am Main, Suhrkamp. (= 2000, 宇京早苗訳『個人の社会-文明化と関係構造』法政大学出版局 .)
- Esser, Hartmut, 1984, “Figurationssoziologie und Methodologischer Individualismus”, *Kölner Zeitschrift für Sozialpsychologie*, 36: 667-702.

- , 1991, "Dutch Sociology from the Viewpoint of an Outside Observer", Becker, Henk. A., Frans L. Leeuw and Kitty Verrips(eds), 1991, *In Pursuit of Progress*, Amsterdam, SISWO publication, 131-39.
- Flap, Henk en Yme Kuiper, 1979, "Figuratiesociologie als onderzoeksprogramma", *Mens en maatschappij*, 54(3): 231-69.
- Gleichman, Peter (eds.), 1977, *Human Figurations: Essays for Norbert Elias*, Amsterdams Sociologisch Tijdschrift.
- Goudsblom, Johan, 1990, "Twenty Years of Figurational Sociology in the Netherlands", W. H. Kranendonk, *Society as Process - A Bibliography of Figurational Sociology in the Netherlands(up to 1989)*, Publikatiereeks Sociologisch Instituut Universiteit van Amsterdam, 13-27.
- , 1996, "Rational and Other Choices: Comments on the Rational Choice Model", *The Netherlands Journal of Social Sciences*, 32(2): 16-25.
- Gouldner, Alvin W., 1970, *The Coming Crisis of Western Sociology*, London, Heinemann. (= 1979, 岡田直之他訳『社会学の再生を求めて』新曜社 .)
- Haan, Jos. de, 1994, *Research Groups in Dutch Sociology*, Amsterdam, Thesis Publishers.
- Israels, Han, Mieke Komen, Abram de Swaan(redactie), 1993, *Over Elias: Herinneringen en anekdotes*, Amsterdam, Het Spinhuis
- Kranendonk, W.H., 1990, *Society as Process - A Bibliography of Figurational Sociology in the Netherlands(up to 1989)*, Amsterdam, Publikatiereeks Sociologisch Instituut Universiteit van Amsterdam.
- Laeyendecker, Leo, 1990, "What Dutch Sociology has achieved", C. G. A. Bryant and H. A. Becker, *What has sociology achieved ?*, London, Macmillan, 221-37.
- Leeuw, Frans L., 1991, "Knowledge Transfer and Application in Dutch Sociology: Some development between 1980 and 1990", Becker, Henk. A., Frans L. Leeuw and Kitty Verrips(eds), 1991, *In Pursuit of Progress*, Amsterdam, SISWO publication, 111-29.
- Lindenberg, Siegwart, 1996, "Low Evidence Situation in the Social and Historical Sciences: Rational Choice as a Heuristic Device", *The Netherlands Journal of Social Sciences*, 32(2): 26-34.
- Mennell, Stephen, 1992, *Norbert Elias: An Introduction*, Oxford, Blackwell.
- Rademaker, L(red.), 1978, *Sociologische encyclopedie*, Utrecht/Antwerpen, Uitgeverij Het Spectrum.
- Swaan, Abram, de., 1988, *In Care of The State: Health Care, Education and Welfare in Europe and the USA in the Modern Era*, Cambridge, Polity Press.
- , 1990, *The management of normality: critical essays in health and welfare*, London, Routledge.
- , 1996, "Rational Choice as Process: The Uses of Formal Theory for Historical Sociology", *The Netherlands Journal of Social Sciences*, 32(2): 3 -15.
- Vall, Mark van de and Frans L. Leeuw, 1987, "Unity in diversity: Sociology in the Netherlands", *Sociological inquiry*, 57: 183-203.
- Visser, Jelle and Anton Hemerijck, 1997, *A Dutch Miracle: Job Growth, Welfare Reform and Corporatism in the Netherlands*, Amsterdam, Amsterdam University Press.
- Wilterdink, Nico, 1982, "De civilisatietheorie in discussie: opmerkingen bij een congres", *Amsterdam Sociologisch Tijdschrift*, 9 : 571-90.
- , 1991, "New Views in Historical Sociology", in Becker, Henk. A., Frans L. Leeuw and Kitty Verrips(eds), 1991, *In Pursuit of Progress*, Amsterdam, SISWO publication, 53-70.
- Wippler, Reinhard, 1978a, "The Structural-Individualistic approach in Dutch sociology: Toward an Explanatory Social Science", *The Netherlands Journal of Sociology*, 14: 135-55.
- , 1978b, "Nicht-intendierte soziale Folgen individueller Handlungen", *Soziale Welt*, 29(2): 155-79.

- , 1985, "Explanatory sociology: The development of a theoretically oriented research program", *The Netherlands Journal of Sociology*, 21: 63-74.
- Wouters, Cas, 1997, *De Informalisieringstheorie in de Civilisatietheorie*, Hagen, Fren Universitat Gesamthochschule.

注

- 1) このテキストは、エリ阿斯に縁のある人物がエリ阿斯との思い出を綴ったもので、エリ阿斯没後に出版された。やはり、多くの人々がエリ阿斯が客員教授としてオランダに招聘されたときの印象、影響について語っている。
- 2) オランダ語で最初に出版されたエリアスの著作は、エリアスの論文や著作からの抜粋を編集し1971年に『社会学と歴史学』として出版された。なお、『文明化の過程』のオランダ語版は1982年に出版され、学術書にも関わらず12000部の売り上げを記録し、ベストセラーとなった。
- 3) 本稿が称す「オランダ・エリ阿斯学派」とは「オランダ社会学・文化人類学学会」内部に創設された「フィギュレーション社会学部会」を指す。1976年の結成以降、オランダ・エリ阿斯学派は積極的な研究活動を国内だけでなく国際的にも行った。例えば、イギリスからダニング (Eric Dunning)、メンネル (Stephen Mennell)、ドイツからコルテ (Hermann Korte)、グライツヒマン (Peter R. Gleichmann) を招き、共同研究を行った。
- 4) ブロークの議論は、学会後に発表された論文 (Blok 1982) をまとめた。この論文は国際学会での報告をもとに執筆されたものである。
- 5) 事実、ブロークは1972年に提出された学位論文を出版した『シチリアのマフィア：1860-1960』(1974) や『ヴィトゲンシュタインとエリ阿斯』(1979) においてエリアスの文明化過程論に忠実な研究を行っていた。また、ブロークはニーマンゲン大学においてアムステルダム大学とならぶ研究拠点の中心を担った。
- 6) 学会においてブロークに対して様々な感情的な反発がなされたが、それらは「エリ阿斯こそが人種差別主義者によって迫害を受けた人物にほかならない」(Mennell 1992: 230) という意見に集約される。
- 7) オランダの福祉国家政策の盛衰をまとめるにあたり、フィッサー (Jelle Visser) とヘーメライク (Anton Hemerijck) (2000)、長坂 (2002)、水島 (2002) の議論を参考にした。
- 8) オランダ・エリ阿斯学派も条件付き融資制度のもとで2つのプロジェクト研究を行っている。この内訳はハウツプロムを中心とした「長期的過程の社会学：知・芸術・モラルティ」とスワーンを中心とした「ケアの社会発生：歴史学的・社会学的視点におけるケアに対するアレンジメントの研究」が1984年から開始された。
- 9) 1983年のフローニンゲン大学社会学部の閉鎖後、社会学部の縮小はアムステルダム自由大学とワーニンゲン農業大学社会学部の閉鎖、レイデン大学社会学部を閉鎖しロッテルダムのエラスムス大学社会学部との合併 (1986年) へと続いた。また、このような社会学部閉鎖と平行して博士号を取得した若手研究者養成機関として「PdIS: Postdoctoraal Instituut voor de Sociale Wetenschappen」を創設することによって、社会学研究者の質的向上を試みた。PdISの責任者にオランダ・エリ阿斯学派のスワーン (Abram de Swaan) が着任するが、そこでの教育プログラムは、フィギュレーション社会学が中心になることもなく、オランダ・エリ阿斯学派以外の社会学者も多く参加することとなった。
- 10) かつてエッセルはエリ阿斯社会学を批判したことがあり (Esser 1984)、そのことからしても、オランダ社会学界におけるオランダ・エリ阿斯学派と説明社会学派との関係に違和感を持つことは、推測できよう。
- 11) アレクサンダー (Jeffrey C. Alexander) が編者になった *The Micro-macro link* (1987) においてウィッブラーとリンデンベルフによる「集合的現象と合理的選択」という論文が掲載されている。なお、この

テキストは邦訳が出版されているが、彼らの論文は翻訳されていない。

- 12) このテキストはオランダ社会学界内外に大きな反響をもたらした。多くの学術誌に書評が掲載されたが、オランダ国内では3つの学術誌において特集号が組まれ、大々的な議論が行われた (Wilterdink 1993: 66)。
- 13) さらに、太郎丸はホモ・エコノミクスの修正の帰結が『『規範や構造に制約されつつ自己にとって合理的な行為を選択する個人』という人間像、つまりパーソンズが初期に持っていた人間観に酷似する』 (太郎丸 2000: 292) と指摘し、現代の合理的選択理論を主意主義的行為理論の伝統の批判的後継者として位置づけている (太郎丸 2000: 293)。
- 14) エリアスは社会学が想定するホモ・ソシオロジクスの人間像を「閉じた人 (Homo Clausus)」と批判している (Elias 1970: 131=1994: 143)。
- 15) オランダ・エリアス学派と説明社会学派との学際的な交流は、1990年代に入ってから継続していた (Goudsblom 1996, Lindenberg 1996, Swaan 1996)。しかし、この学際的な交流がオランダ・エリアス学派の理論的展開にどれほどの影響をもたらしたのかは疑問である。この点についても稿を改めて議論を行うこととしたい。